令和８年度
霧島市議会文教厚生常任委員会
行政視察報告書



志布志市役所　庁舎前にて

（志布志市・鹿屋市）

令和８年７月１０日（金）

文教厚生常任委員会行政視察

１．視察日程　令和８年７月１０日（金）

２．視察先及び視察内容

⑴　志布志市

視察内容　学びの多様化学校の取組について

人　　口　２７，９３７ 人（１４，９８１世帯）

面　　積　２９０．２１㎢

議員定数　１６名

⑵　鹿屋市

視察内容　英語教育の取組について

人　　口　９５，１４７人（４４，９４８世帯）

面　　積　４４８．１５㎢

議員定数　２６名

３．参加者

委員長	久木田　大　和
副委員長	塩井川　公　子
委　員	田　中　紗弥佳
委　員	渡　邊　理　慧
委　員	立和田　広　司
委　員	渡　邉　圭　章
委　員	植　山　太　介
委　員	竹　下　智　行
随　行	岩　澤　佑　未
随　行	德　丸　慎　一

４　視察概要

■ １０時００分　志布志市

視察内容　学びの多様化学校の取組について

＜概　　要＞

不登校支援について、志布志市に学びの多様化学校が開校されたことから、その取組について学んだ。志布志市では不登校になってしまった児童生徒の回復について、しっかりと受け止め、安心安全な環境づくりをするための方法の一つとして、志布志市学びの多様化学校「悠志学園」を設立した。

それまでの学びの多様化教室「松風」で支援を行っていたが、不登校児童生徒数の増加や既存施設が手狭になってきたことから検討を開始した。

学校設立まで登校支援に係るアンケートを実施し、方針を決定。約２年で設立まで進めた。

○　悠志学園の施設

通常の施設に加え、教育相談室、リラックスコーナー、センサリールーム、学びの多様化教室「松風」などを配置し、子どもたちへのきめ細やかな対応を実施。

○　悠志学園が大切にしたいこと

「ゆっくり　じっくり　ともに　未来へ」～子供の多様性や主体性を尊重し、人とのつながりを大切にしながら、子どもたち一人一人に応じた学びを支援します～

○　悠志学園の取組

授業時数 875 時間が一般の学校 1,015 時間と比べて少なく、道徳や総合の授業等を多く組むことで、子どもたちの主体的な活動について取り組むことができるようになっている。通学については、親の送迎や志布志市の循環バスなどを利用。

■ １３時３０分　鹿屋市

視察内容　英語教育の取組について

＜概　　要＞

鹿屋市では、2009 年には 112 人に 1 人から、2024 年には 29 人に 1 人に増加した外国人に対し、地域を支える「隣人」として、子どもたちにも親しみを持って共に暮らしてもらいたいとの思いと、英語は多様な社会で「他者を理解し、自分を伝える」ための大切なコミュニケーションツールとなることから、英語教育の取組を進めてきた。地球規模で考え、郷土を愛し行動する「グローカル人材」の育成を目指している。

鹿屋小学校５年生の英語の授業を見学した。授業では、自己紹介や好きなこと、嫌いなことを自分で発表できるようにタブレットに事前にまとめたものを用意し、互いに伝えあったり、質問をしたりする授業を行っていた。英語指導講師を導入しており、担任が授業を進め、講師が発音や児童のサポートなどを適宜行いながら、英語の理解に努めていた。

令和４年度から、小学１、２年生は年 20 時間の英語の授業を行い、３年生からは国の指導要領に準じ英語科として英語が好きになるような指導を行っている。また、台湾の学校と国際交流を行い、異文化理解に取り組んでいる。あわせて、イングリッシュデイキャンプや英語弁論大会などにも取り組み英語に親しんでいる。結果として教科の好き嫌いでは英語を好き、まあまあ好きと答えた児童が８割以上と、他の教科と比べ 30%以上多くなっている。指導に関しても小中学校担当教員による英語教育推進会議を年に２回開催し、中学校の英語教育との連携に努めていた。

○　英語指導講師の配置

７名が拠点校から担当校 15 校へ派遣している（鹿屋市内の小学校は 22 校）

○　英語指導講師の役割

- 学級担任とのチームティーチングを中心とした外国語活動の学習指導
- 指導計画の作成
- 教材研究開発等への参加

５　所感

■ 委 員 長　　久 木 田　　大 和



【志布志市】

学びの多様化学校「悠志学園」の取組は、従来の学校に行きづらい子どもたちにとって、通常授業数の削減や総合学習の授業を増やすなどの制度変革、学校内の通常想定される使い方以外にフリースペースやセンサリールーム、相談室といったそれぞれの子どもたちが過ごしやすい環境づくりなどのインフラ整備に加え、教職員も特性のある子どもたちに寄り添う形で関わるなど、様々な配慮がなされた学校となっていることが分かり、不登校の子どもたちにとって一つの居場所として考えられていると感じた。

一方で、転校となるため、友達との関係性は良好な場合などは転校による人間関係の再構築の課題、学校としてのイニシャルコストやランニングコストについても考えなければいけない。トップダウンにより計画からわずか２年余りで設立までこぎつけた中で、審議会や対象児童生徒のアンケートなど市民の声を反映させながらもスピード感を持って取り組まれたことは、子どもたちの居場所について真剣に考えた結果であると思う。

子どもたちの学ぶ取組について個別に配慮し、席替えの心理的負担、子どもの特性に合わせた授業など工夫している点もたくさんあって、これは他の一般の学校においても実施できるような点もあり、この多様化学校の取組を先進事例として各学校が考える機会にもなると感じた。多様化学校の可能性を感じるとともに、学校で出来る様々な配慮等については今までの学校の中でも活かしていける点もたくさんあり、学校という場において子どもたちの過ごし方を考える場として学びをこれからも進めていくべきだと感じた。

【鹿屋市】

鹿屋市の英語教育について鹿屋小学校での取組と鹿屋市の状況について学びを深めた。鹿屋小学校においては５年生が自己紹介、誕生日、好きなこと嫌いなことなどをお互いに紹介したり、質問したりする授業を行っていたが、積極的に楽しみながら取り組んでいる姿が印象的だった。

英語指導講師と担任が役割に応じて授業を進めながら子どもたちの意欲を引き立てている点、講師の発音を真似したり実際にしゃべったりするなど、英語に触れることによる楽しさを感じられる点を実際に目にしたことで学びになった。

鹿屋市全体で台湾との交流を進めている点や、小学校１年生から英語学として授業を行っていること、英語指導の小中学校の先生方による学びの場を年に２回開催し、中学校へのスムーズな学びへつなげる取組をするなど、鹿屋市の外国人居住者が増えている現状を踏まえて、英語教育をツールとしたグローカル人材を育成する市の取組は興味深いものである。

英語指導講師も授業のサポートとともに、イングリッシュデイキャンプ、英語弁論大会など市独自の取組を行っており、重要な役割を果たしていると感じた。霧島市の英語教育、ＡＥＡについても鹿屋市の担当者から評価いただいたが、本市においても小中学校の学びをスムーズに進めるための話し合いなど、参考にすべき点も多くあると感じる視察だった。

■副委員長　塩井川　公子

【志布志市】



学校へ行きづらい子どもたちのために、不登校特例校が全国に着々できており、志布志市には県内初の小中学生向け公立校が令和８年度に開校した。

福田教育長は、不登校で７年間１回も学校へ行けない生徒がいて卒業証書のみ自宅へ届けたという経験があり、強い思いで学校をつくるために動かれたようである。なお、志布志市には 20 年前に開設された、学びの多様化教室「松風」もある。



令和５年、県内で初めて文部化科学省への手続きを行い、時代をつくった。教育委員会、議会の後押しもあり、２年後には開校できたとのことであった。４月 16 日に開校した悠志学園には現在、前期小学部６名、後期中学部 19 名が在籍しており、「共に創り、共に輝く」を学校の教育目標に掲げ、ソーシャルトレーニングや対話活動に取り組んでいる。

前向きな取り組みや、多くの方々の思い・情熱が伝わり、大変感銘を受けた。

【鹿屋市】

鹿屋市鹿屋小学校の授業を見学した。英語が大好きな子どもたちをイメージし、小学校１年から児童の興味・関心や理解度に合わせた英語を使って段階的に指導していた。

小学校６年間を通して、総合的にコミュニケーション能力の基礎を育成し、小中一貫による英語教育の推進を図ることを目指し、台湾の学校との交流を進めていた。令和８年３月までに市内 31 校が台湾の学校と協定を締結しているとのこと。台湾との時差が１時間で交流しやすいとの話もあった。

鹿屋市の小学校では、外国語活動、外国語の学習指導要領を踏まえたうえで、先進的に研究開発を進めることを目的として、英語科という名称でカリキュラムを進めていた。

また、地域と世界をつなぐ多彩なグローカル・アクションとして、グローカル・イングリッシュ・デイキャンプ、台湾との交流、かのやこどもＰＲ大使の台湾派遣、グローカルコンテスト（旧英語弁論大会）など、様々な取組を行っていた。

授業を見学させていただき、子どもたちの元気な声、輝いた目に大変感動した。先生と英語指導講師の方のやりとりも、阿吽の呼吸でリズム感があり、すばらしいと感じた。子どもたちものびのびと話しかけてくれた。

■ 委 員　　田 中　　紗 弥 佳

【志布志市】



決して多くの子どもを集めることが目的ではなく、「本来はそれぞれの学校で安心して学べることが一番大切。それでもどうしても難しい子どもたちの最後の選択肢として存在したい」という考え方が非常に印象的だった。また、「支援が必要だから特別なのではなく、支援があって当たり前の社会を目指したい」という理念にも深く共感した。

今回の視察を通して感じたのは、特別な学校を増やすことだけが答えではなく、悠志学園で実践されている子どもへの関わり方や考え方を地域の学校へどう広げていくかが重要だということである。

霧島市においても、不登校や学校生活に不安を抱える子どもたちは増えている。一人でも多くの子どもが「学校に行けるかどうか」ではなく、「安心して自分らしく学べるか」を大切にできる教育環境づくりについて、今後も議会の立場から考え、提案していきたいと思う。

【鹿屋市】

鹿屋市は平成 17 年度から英語教育に力を入れていて、県内で唯一、小学校１年生から英語の授業がある自治体である。目指しているのは英語力だけではなく、令和４年度からは「グローカル人材」（グローバル×ローカル）の育成を掲げている。鹿屋市では外国人の児童生徒が急増し、以前の約 10 倍に。この流れは今後も加速していく見込みがあり、対応できる人材育成に市全体で取り組んでいる。小学１・２年生はオリジナルカリキュラムで２週間に１回ほど（予備の時間を使って）授業を行う。数字や色など、まずは英語の音に慣れることを大事にしている 。授業はＪＴＥ（日本人英語教師）が学級担任と一緒にティーム・ティーチングで進行している。

小中連携として「英語教育推進会議」を年２回、市内５地区で開催している。台湾との交流も盛んに行っており、市内 35 校（小中高）がすでに台湾の学校と協定を締結。年間 10 校は対面で交流、残りの 20 校はオンラインで、動画のやりとりなどを通して交流している。

学校の外でも、グローカル・イングリッシュ・デイキャンプ、台湾との交流事業、かのや子供ＰＲ大使台湾派遣（小学生４名・中学生３名・高校生２名）、グローカルコンテスト（以前の英語弁論大会）などＪＴＥが関わり活動している。子どもたちが純粋に英語を楽しく学べる環境を、これからも大事にしていきたいという市全体の思いがあり、外国語教育に力を注いでいた。

霧島市も空港や企業があり、外国人労働者の増加とともに外国人児童生徒の増加も考えられる。単に外国語ではなく、コミュニケーションの一つの手段として外国語を学ぶという目的が明確な工夫された授業内容だった。霧島市の外国語の授業もＡＥＡの先生を筆頭に積極的な取り組みがなされている。継続した授業の維持とティーム・ティーチングの強化を高めるために鹿屋市の取組のような推進会議などを取り入れていくべきだと思う。また、親世代も小学校では英語教育を受けていない方がほとんどだと思うので、授業内容を見る機会が増えると家庭と協力して英語教育への取組ができるのではないかと思う。

■委員　渡邊　理慧

【志布志市】



日本における不登校児童生徒数は過去 20 年以上にわたり、増加傾向にある。文部科学省が行った調査では、令和６年度の国立、公立、私立の小中学校の不登校児童生徒数は約 35 万４千人で、過去最多となっている。

学びの多様化学校（不登校特例校）は、不登校の児童生徒の実態に配慮して特別な教育課程を編成できる、文部科学省が指定した学校である。2005 年７月から行われており、以前は「不登校特例校」という名称だったが、当事者や教職員から「特例という言葉に抵抗を感じる」といった意見が寄せられたため、2023 年８月 31 日に「学びの多様化学校」へと改称された。

急増する不登校児童生徒に対応するため全国各地に設置をされており、柔軟なカリキュラムや少人数での丁寧な指導を通じて社会的自立をサポートしている。鹿児島県内でも志布志市で 2026 年４月に「学びの多様化学校」である、志布志市立悠志学園が開校した。

志布志市では通所により在籍校で出席扱いとなる、市教育支援センター「松風」が運営されているが、近年の利用増により施設が手狭となっていたことから、支援環境のさらなる充実のために、新たに悠志学園の設立を行ったとのことであった。

教育長の熱い想いもあり、早期整備をするために迅速な決定をされていることがうかがえた。2024 年２月に先進校を視察され、およそ２年で設立、開校に至っていることに驚きを感じた。授業時数の編成に一番時間が掛かったとのことでしたが、何度も文部科学省とやり取りを交わされたとのことで、とても力を入れていることが分かった。

施設については、空き施設となった庁舎別館を活用することにより、コストが抑えられたとのことだった。学校施設環境改善交付金と、学校教育施設等整備事業債と、施設整備基金を活用されている。総合体育館や屋内プールが近くにあり、とても良い環境である。もともとある施設を有効活用され、周辺の施設も利用できるため、一石二鳥となっていた。霧島市でも、既存施設の活用については参考になるのではないかと思う。

内装は写真で見た感じでは、交流しやすいオープンスペースになっているメインホールや学習エリアがあり、広々としている印象を受けた。また、理科実験室と家庭科調理室と音楽室など、複数の機能を兼ね備えた特別教室を作っており、教室を省スペースで活用する工夫をされていることが分かった。教室によっては、可動式の壁を設置するなど、子どもたちの状況に合わせて臨機応変に対応できるような作りになっており、過ごしやすい居場所づくりを考えて設計されている。

授業以外にも、楽しく過ごせるようなイベントも企画されており、子どもたちが通いたくなるような制度設計をいろいろな角度から検討されていることが、とても参考になった。

【鹿屋市】

鹿屋市では、英語は多様な社会で「他者を理解し、自分を伝えるための大切なコミュニケーションツール」であるとしており、2005 年から、「かのや英語大好き特区」として、英語教育に力を入れている。

全国の住民構成では、2009 年は 112 年に１人が外国人（学校のクラスで例えると３クラスに１人ほど）だったが、2024 年には 29 人に１人（クラスに１人）に増えている。

近年は外国の方と関わる機会が増えてきており、鹿屋市では、違いを否定せず受け入れ、世界中の人々と協働しながら、ふるさと鹿屋に貢献できる人を育てることを目的としている。「物事をグローバルな視点で考え、行動できる人材」と「多様な他者と協働して、ローカルに課題解決に取り組める人材」を掛け合わせた、「グローカル人材」という言葉を使っていた。

台湾の学校と協定締結をしており、台湾の子どもたちと英語で交流をしている。台湾の生徒が鹿屋市に訪れ対面交流をする、オンラインで交流を行うなど、異文化を相互理解する取り組みが行われている。

また、英語の授業は小学校１年生から行っており、小学校１、２年生の教材は学校の先生が作成するオリジナルのものを使用しているとのことだった。英語の授業が好きと答える生徒も多いようで、苦手意識を持たせないようにする工夫がされているのだと思う。

鹿屋小学校も見学したが、担任の先生と英語指導講師が協力して英語の授業を行っている様子が分かった。タブレットを使用したスペルの書き方や発音の仕方のほかに、学習した英語を使って子どもたち同士で会話をする時間もあった。積極的に会話ができた子には「Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ」や「Ｎｉｃｅ　ｔｒｙ」と書かれたカードを渡すなど、モチベーションを上げるような工夫もされていた。

霧島市でもＡＥＡの先生が活躍されている。私も霧島市の学校の状況をもっと把握し、鹿屋市の楽しく英語に触れられるような取り組みを参考にさせていただきながら、今後の英語教育が進んでいけたらと思った。



■ 委 員　　立 和 田　　広 司

【志布志市】



志布志市立悠志学園（学びの多様化学校）は、空き施設となった有明支所庁舎別館を整備、改修工事を施し、令和８年４月に開校された。登校支援に関するアンケートや、教育支援センター学びの多様化教室「松風」の状況を踏まえ、教育委員会、庁議などを経て多様化学校の設置を決定したそうである。悠志学園周辺には、屋内プールや総合体育館、地域の図書館など施設も充実している。

校舎の間取りを見ると、メインホールを中心に明るく広々とした空間があったり、周りが気になる児童生徒に配慮したセンサリールームを備えている。オープンカウンターの職員室で廊下との仕切りをなくし、開放的な空間が広がる。職員数としては、県費職員が 13 名、市費職員が２名、計 15 名、児童生徒は現在 25 名となっている。なお、受け入れの最大人数は 40 名となっている。

不登校児童生徒の増加する本市においても、必要性を感じた。

【鹿屋市】

英語教育の取組について、鹿屋市立鹿屋小学校を訪問させていただき、５年生の英語の授業の様子を拝見した。

鹿屋市において、外国人の人数は 20 年前と比べて約 10 倍の 1,300 人。鹿屋市では、小学校１年生から英語教育に取り組んでいる。多様性を理解するグローバルな視点、地元のことを知り、発展させていくローカルな視点、造語であるが「グローカル」人材として育成している。

令和４年には鹿屋市教育委員会と国立台北教育大学が教育協定を結び、交流を進めている。学校外での活動ではあるが、グローカル・イングリッシュ・デイキャンプを紹介。地域に住む外国人と英語でのミニキャンプを年に 10 回ほど行い、40～50 名が申し込みをしている。

様々な取組を紹介いただき、児童生徒が英語を好きになる工夫を学んだ。



■ 委 員　渡 邉　圭 章

【志布志市】



志布志市の「学びの多様化学校の取組について」行政視察を行なった。不登校傾向の子どもたちの「これまで」を丁寧に掘り起こし、どのタイミングで、何がきっかけで学校に行けなくなったのかを分析し、「適応してもらう」という発想を「学びの多様化」へと転換させた点に感銘を受けた。子どもに合わせるという当たり前のことを、制度として形にした取り組みだと感じた。

説明の中で特に印象に残ったのは、支援を段階的に重ねているという点だ。まずスペシャルルーム等を活用するなど各学校での対応を基本としながら、それでも難しい子どもには多様化学校や教育支援センター、家から出られない子どもにはオンライン支援へとつながる選択肢を丁寧に用意している。どこかに「送り込めばいい」という発想ではなく、すべての場がつながって一人の子どもを支えるという姿勢が、言葉の端々から伝わってきた。「支援がフェードアウトしていくことが究極の目標」という言葉には、子どもの自立を本気で見据える覚悟が感じられた。

また、旧庁舎の別館を活用し、国の補助制度を組み合わせることで約 2.5 億円という現実的なコストで整備した点も、大いに参考になる事例だった。教育長の様々な経験や、かつて７年間一度も登校できなかった子どものことを語る言葉には、深い痛みとそれでも諦めない現場の覚悟を感じた。

霧島市にも、今日も学校に行けずにいる子どもたちがいる。学びの選択肢を広げることは、子どもたちの未来を守ることである。この視察で得た学びを、霧島市の教育政策の議論にしっかりとつなげていきたい。

【鹿屋市】

鹿屋市の「英語教育の取組について」行政視察を行った。まず鹿屋小学校を訪問し、５年生の英語の授業を参観した。子どもたちが積極的に英語を使いコミュニケーションをとる姿は、英語に対する抵抗感が全くなく、20 年にわたる取り組みの成果そのものだった。参観した私自身も、その活気ある雰囲気に引き込まれ、楽しい時間を過ごすことができた。

次に、行政側からの説明の中で最も印象に残ったのは、「英語教育」から「グローカル人材の育成」へと舵を切ったという発想の転換だ。英語はあくまで一つのツールであり、違いを否定せず受け入れ、世界中の人と協働しながらふるさとに貢献できる人を育てるというコンセプトである。平成 17 年から県内唯一の小学校 1 年生からの英語教育を続けてきた鹿屋市が、20 年の蓄積をへてさらに一歩先へと踏み出している姿勢に、教育行政への本気の覚悟を感じた。

また注目したのは、外国人住民の急増という現実だ。合併当初 130 人だった外国人が今や 1,300 人を超え、約 10 倍に膨れ上がっている。担当者は「町が 1 個消えるほど日本人が減り、村が 1 個できるほど外国人が増えた」と表現した。この変化は鹿屋市だけの話ではない。多くの企業を抱える霧島市においても、すでに同じ潮流が押し寄せつつある。子どもたちが将来、多様な人々と共に地域を支え

ていく力を今から育てることは、待ったなしの課題だと改めて感じた。これらの英語教育を支えているのは、ＪＴＥ（英語指導講師）７名の配置による丁寧なティーム・ティーチングと、小中９年間を見通した一貫した役割分担、さらに小中連携会議による接続ギャップの解消などであり、霧島市でもすぐに参考にできる実践が多くあった。この視察で得た学びを、霧島市の教育政策の議論にしっかりとつなげていきたい。







■委員　植山　太介

【志布志市】



不登校児童生徒への学びの機会の提供、既存の市教育支援センター「学びの多様化教室」の利用者が増加傾向にあること、さらに庁舎統合に伴う空き施設の有効活用などを背景として、学びの多様化学校が開校された。

市内では小中学校の統廃合が進んでいるが、地域住民や市議会からは当初より事業への理解が得られ、反対意見はなかったとのことであった。その要因として、多くの子どもたちに新たな学びの場を提供するとともに、既存の小中学校の負担軽減につながる教育環境の整備であることに加え、事業費の約９割を有利な交付金や起債で賄い、市の財政負担を最小限に抑えたことも挙げられると感じた。

受入可能人数は前期課程 10 名（現在６名）、後期課程 30 名（現在 19 名）であり、今後の利用状況については見通しが不透明との説明であった。

視察の中で最も印象に残ったのは、「将来的には、学びの多様化学校そのものが必要なくなる教育環境を実現することが目標である」という説明者の言葉である。不登校児童生徒の学びの場を確保することは重要である一方で、学びの多様化学校そのものの在り方や、その役割についても考えていく必要があると感じた。

国や県の動向も踏まえ、本市においても、既存施設の活用も含め、どのような形が総合的に最も適切であるかについて研究を進めていきたい。

【鹿屋市】

まず、市内小学校の英語授業を見学したが、タブレットを活用しながら、コミュニケーションを重視した「話す英語」の学習が実践されており、大変感銘を受けた。学級担任と英語指導講師の役割分担も明確で、特に英語指導講師によるネイティブな発音に加え、豊かな表情やジェスチャーを交えた指導は、児童が楽しみながら英語に親しめる環境づくりにつながっていた。

英語教育は、単に教科として学ぶだけでなく、世界とつながるためのコミュニケーションツールとして捉えることが重要であると改めて感じた。英語指導講師は本年度１名増員し、現在７名体制で運営しており、この体制で学校への対応は概ね充足しているとのことであった。一方で、急な離職者が発生した場合の人材確保には苦慮しており、人材確保が課題であるとの説明もあった。

また、市の特色として、小学校１・２年生から予備授業を活用した英語教育を実施しており、早い段階から英語に親しむ機会を設けている点も特徴的であった。

本市においても、英語を「話す」「伝える」力を育む授業づくりや、ICT を効果的に活用した英語教育の充実は今後ますます重要になると考える。また、その実現には、英語指導講師など専門人材の安定的な確保も欠かせないことから、指導体制の充実も含め、今後の取組について研究していきたい。

■委員　竹下　智行

【志布志市】



今回の視察では、志布志市の「学びの多様化学校（悠志学園）」の取組を拝見し、不登校児童生徒への支援の在り方について深い示唆を得た。

最も感銘を受けたのは、「学校に行かせる」という従来の指導から、「子どもが安心して過ごせる居場所をつくる」という理念への明確な転換である。施設整備において、既存の庁舎を有効活用することでコストと工期を抑えつつ、オープンな職員室など、子どもの心理的安全性に配慮した環境が整えられていた。また、授業時数の柔軟な調整や子ども主体の行事企画など、画一的な教育から脱却し、個々のペースを尊重する姿勢が徹底されている。

特筆すべきは、この学校が唯一の解決策ではなく、教育支援センター「松風」やオンライン支援、既存校での環境調整など、重層的な支援体制の一部として位置づけられている点である。教育長が語られた「支援の究極の目標は支援が不要になること」という言葉は、特別支援教育の本質を突いていると感じた。構想から２年で学校を設立させたスピード感に不登校支援に対する志布志市の意気込みを感じた。

霧島市においても、不登校児童生徒への対応は喫緊の課題である。志布志市の事例は、ハード面の整備だけでなく、教員の意識改革や地域住民との合意形成、そして何より「子どもたちの声」を起点とした学校運営の重要性を教えてくれた。今回の視察で得た知見を、本市の教育行政の充実に生かしていきたい。

【鹿屋市】

タブレット端末の効果的な活用によって児童が英語での対話や発表練習に主体的に取り組む姿が見られ、学習への高い関心が育まれていることが確認できた。

また、担任と英語指導講師が緊密に連携した授業は、きめ細やかなサポートとクラス全体の一体感を高める効果的な体制となっていた。こうした早期からの実践的な英語教育を通じて、英語を「学ぶ」だけでなく「楽しむ」経験を積み重ねることは、国際社会に通用する人材育成の重要な基盤となり、中学校以降の学習意欲の継続にも大きく寄与すると再認識した。

今後は霧島市議会として、鹿屋市の先進的な取り組みを本市の施策へ具体的にどう反映させるか深く議論をしていきたい。

■ 委 員　　川 窪　　幸 治

【志布志市】



志布志市立悠志学園は、鹿児島県内初の公立学びの多様化学校として開校し、不登校や学校生活に不安を抱える小中学生が安心して学べる環境づくりに取り組んでいる。

児童生徒一人一人の状況に応じた教育課程を編成し、少人数による学習やコミュニケーション活動、体験学習を取り入れながら、自分のペースで学び、成長できる教育を実践している。また、校内にはリラックスできるスペースを設けるなど、安心して過ごせる居場所づくりにも力を入れていた。

視察を通じて感じたのは、学力向上だけでなく、子どもたちが安心して通える環境づくりを最優先にしている点である。一人一人に寄り添い、自己肯定感や社会性を育みながら、将来の自立につなげる教育が実践されていた。

不登校児童生徒が増加する中、このような多様な学びの場は重要性が高まっている。霧島市においても、教育支援センターや学校との連携を深めながら、子どもたちが安心して学べる環境づくりについて検討する必要があると感じた。

【鹿屋市】

鹿屋市の英語教育は、「英語を学ぶ」ことを目的とするのではなく、「英語を使って地域や世界とつながる」ことを目的としている点が非常に印象的だった。

小学校１年生から英語教育を実施する特別の教育課程を導入し、小中学校９年間を見通した一貫した英語教育を推進している。

授業を見学した際には、英語指導講師と担任教員が互いの役割を十分に理解し、息の合った指導を行っており、児童が楽しみながら主体的に学ぶ姿が印象的だった。子どもたちは英語でのやり取りに積極的に取り組み、自然にコミュニケーションを図る様子が見られ、このような学びを積み重ねることが実践的な英語力の向上につながるものと感じた。また、学校だけでなく、家庭や地域、英語指導講師、さらには海外との交流を通して、子どもたちが「わくわく」しながら学べる体験的な学習環境が整えられていることも大変印象的だった。

郷土の歴史や文化、観光資源などを英語で紹介する学習や、台湾をはじめとした海外との交流を通して、児童生徒が主体的に考え、自ら発信する力を育成していることは、多文化共生社会を見据えた先進的な取組であると感じた。今後、外国人住民や観光客の増加が見込まれる中、英語によるコミュニケーション能力だけでなく、自分の地域に誇りを持ち、その魅力を世界へ発信できる人材の育成は、地域の活性化にも大きく寄与するものと考える。本市においても、英語教育を単なる教科学習にとどめることなく、地域資源や国際交流と結び付けた特色ある教育活動を推進することで、地域に誇りを持ち、世界で活躍できる子どもたちの育成につなげていくことが重要であると考える。

以上、文教厚生常任委員会の行政視察の報告とする。

霧島市議会議長　徳田　修和　殿

文教厚生常任委員会

委員長	久木田　大　和
副委員長	塩井川　公　子
委　員	田　中　紗弥佳
委　員	渡　邊　理　慧
委　員	立和田　広　司
委　員	渡　邉　圭　章
委　員	植　山　太　介
委　員	竹　下　智　行
委　員	川　窪　幸　治